

下山總裁の追憶

旦 那 と 私

能 潤 錦 作

がいるのである。相撲界では馬鹿野郎というても決して悪い言葉でない。此處に敬語と陰語を二三紹介する。先ず親方は蔭ではおやぢない。尚相撲通には良く通る陰語が沢山あるが、ケチン坊は藤助。人か

ら物を貰うのは褒めるという。普通人は塩辛い食物を塩っぱいといふが、相撲界ではまづい事という。例えば相撲に負けて来て今日の相撲はしよっぱかつたなど。その他一般人にも通り言葉になつたが第一に八百長。うつちやり肩すかし等がある。政治家がテレビや新聞に党二役党三役とかいう。それまでは良いが四役というと相撲社界では馬鹿にした言葉である。陰語の時代と共に変わつて行く様

相撲社会では横綱大関でも一番コワイものは自分の師匠である。生みの親よりも育ての親と言うわけでもあるまいが、私の場合は特にコワかつたのは外にもう二方が居たのである。元横綱鳳闘と（部屋の続柄で伯父さんに当たる方）もう一人のお方は旦那である。（旦那とは昔さんの事である。以後も昔さんを旦那と書く）

扱て師匠は大酒豪家であり、一種の酒道楽ともいう程であった。このそしてお酒を飲む時は必ず叱言が出る。一種の酒癖でもある。この叱言を相撲社会で説教という。良く言えば酒の肴とも思われるし又決して乱暴はせぬ。おかみさんは色々の用事で親方の世話を出来ぬのである。此處に日光山という栃木県から来た若者であんまり有望ではなかつたが、頗る無邪気で親方の身の廻りを良く世話をするので親方も大変可愛がつていた（親方とは師匠の事である）。食事の時に

私は親方の説教は好きだつた。親方が食事の度に説教が始まることで逃げ出すものもいたが、私は好んで聞きに行つた。親方は日光山口をいい、その時など親方は馬鹿野郎といふぐらいで却つてござげり、場合によつては説教変じて歌い出す事もあつた。なかなか上手

さんや、先々代の高砂さん、今日では故時津風理事長にも日光山型

でもあり、洒れもいうた。親方は自分達が相撲で勝つてもあんまり褒めた事はないであつたが、おかみさんが「能代さんが相撲で勝つとこきげんで深酒も呑ます、余程嬉しいんですよ」とよくいわれた(私を能代さんというた)。親方もやつぱり人の子で弟子が勝ち嬉しかつたのでしよう。

話は大ぶん元に戻るが、大正四年親方の師匠が永の病いの後、遂に他界した。親方は幼少の頃からもらわれて来ていたので、その相続者となり、錦島(年寄名)と大蛇鶴(力士名)の二役を兼ね、二枚鑑札となつたのである。私は当時序二段であつた。大正六年頃である。大阪での興行中鳳閣と同宿であり、親方と(その時分は親方の関取時代)呑み仲間らしいお方と三人で時々おそく帰館するのである。吾々の部屋は大ぶん離れているが深夜の事であるから、相當にウルさく聞こえるのである。何んとその呑み仲間が旦那ではないか。

当時東京の部屋にも時々お見えになり、部屋のために自ら会長になつて錦島後援会を創立して下さつたのである。後援会は会則が必要であり、その会則に曰く、先ず一、幕下昇進の時は衣服一、十両昇進の時は衣服、化粧廻一、入幕の時も同じ。三役に昇進した時は衣服又は化粧廻を贈呈すとあり、それまではよかつたが大関横綱昇進の場合ほど書いた時は、何んと人を小馬鹿にした皮肉な会則だと思つたのである。自分も幕下当時は一般からも有望力士の部類であつたので、幕の内ぐらいは何んとしてもやつて見せると奮発心が起きたのだが、その時ばかりはむしろ腹が立つたのである。

此処に紹介するお方がある。それは当時新橋の東家(あさまや)という待合の女将さんは大の相撲ファンで男勝り、謂ゆる女傑で、相撲のためなら財産もおしまぬ。若かりし頃は相撲のために二度も破産した事が

あると聞く。当時時代も良かつたから再建も早く常に女中さんの事を馬鹿野郎などと呼んでいたが、女中さん達は女将さんの心理を得たもので「家の女将さんがお相撲さんが東京にいるとこきげんでああいう言葉を使うんですよ」という。

又錦島会の会員でもあり、本場所中の帰りにも良く部屋にも寄つて下さつた。会員の方々も場所中は東家に集合したのである。女将さんはこんな気分の方だから私は大蛇山さんとはお揃いの着物など貰う事も時々あつた。その時などは旦那にこれこれと報告するのでそうすると旦那は「あー又おれのつけ(勘定)が高くなつた」と仰言つた。そして旦那のいわれるにはお茶屋という所はお銚子を十本出した。そしたら二十本出した事にしないともうからぬもの、又それと知つてながら行く様でなければ本当のお客でないと。こんなことをいうたらお茶屋に怒られるかも知れぬが親方も大体同じ様な事をいう。酒は氣違水という、馬鹿になるにはこれに限るものと、国元の祖父も酒は呑み様によつてこんな良いものはないが、反対なればこんな悪いものはない」と常にいうのである。後援会からは関脇昇進の時に実に立派な祝品を贈られると共に盛大なる宴会をしてもらつたのであつたが、大関昇進の時は大正十五年で当時大正天皇がおかくれになり、お祝事一切禁止され残念ながら出来なかつたのである。又話が戻るが、親方は大正七年秋九州巡業中タン毒病に罹かり、博多の大学病院に入院し九死一生で助かつたのである。以来、相撲土俵上再起不可能となり大正九年引退し、年寄錦島専門になつたのである。なお時を稍々同じくしておかみさんを娶つたのであり、当時先代のおかみさんもご健在であり、親方を衆さん又は衆蔵と呼んでいた。親方の本名は衆蔵というた。前にも申し上げた如く錦島家の養

子に貰っていたのである。外に別段道楽もなく前に申し上げた如くお酒一筋であった。最高の白鷹を愛用し常に四斗樽を備えており且那に初飲みの封印を切つて貰うのであり、自から電話で、且那のご都合で封印を切るので来て下さいと何よりも楽しみにしていた。且那も何時もの事で心得たもので、会社から直ちに来て下さつたのである。その時は親方もごきげんで勿論説教もなく、その時に限つて部屋にお泊りになり、親方も早寝である。且那も翌日の稽古を見るのが目的である、老おかみさんは且那に「叢蔵が何時も深酒を呑み過ぎるので困るから」というたら、且那は「私が見習してやる」とのお言葉でおかみさんも大喜びであった。当時はたしかに深酒は慎しんでいたのであるがそれも束の間、老おかみさんが亡き後はその意見役と良く深酒をやつていた。

私は且那に煽てられて大闘になつた。親方の話に且那曰く「人を励ませるには秘伝が三つある。一、おだてる事。一、叱かり付ける事。一、なぐる事。兎に角参考になる事ばかりいうのである。ある時巡業中親方と二人切りで食事した時である。親方は前にも申し上げた如く相撲に勝つても褒めた事は先ずないがその時に限り「且那衆はお前の大闘になる事を期待して居る」という。而し私が「国にいる頃から秋田県は昔から名力士が沢山出るが大闘は出ない所と聞かされている」というたら「昔は兎も角も今は時代が違う、先ず三役に昇進すれば次の場所にはきっと負越しであるが、お前は最高に近い勝ちづけである、今迄の記録を見ても当然大闘になれる」と且那は特に期待している」と。決して褒めた事のない親方に左様いわれたので大いなる奮發心が湧き出したのである。このおだてがなかつたら平凡な三役相撲で終つたかも知れぬ。幕下時分に且那の得意

の戒めの一手で泣かされた事がある。それは一寸した事で国元へ帰つて馬と一緒に働けと一撃喰わされたその時に、東家さんでおかくさんという老妓が一人同席していて同情してもらい泣きしたのである。且那はそんな事は忘れているにちがいないが後で思うと勿論八百長けんつくであり大笑した事がある。又大闘になつてからの事、且那が東家さんへ二三のお客を招き自分も同席したのである。お挨拶早々且那はまじめな顔で、お前に悪い事をさせたなというのである。同席のお客連もその真相もわからず穏やかでない顔つきをしており、どう考えても自分にも想像つかないので、且那それは一体何の事でしようかと聞いた時に丁度東家の女将さんが上がつて来た。女将さんは一人で大笑いしているので合点が行かぬと、女将さん曰く「且那はお前が大闘になつた事を嬉しくてからかつたんだよ」と、そうしたら当の且那もお客様達も一度に爆笑したのである。そのお客様達は何時も且那と一緒に来る方で、その方に自分は且那におだてられて大闘になつたのだから且那の責任も重大だといふたのがそのまま且那に話したらしいと聞いた。且那もその一手で相当に人が悪いと思い乍ら嬉しかつたのである。

▽ 課題句 募集 △

藤村 忌

村松 熊耳選

締切 十一月十日

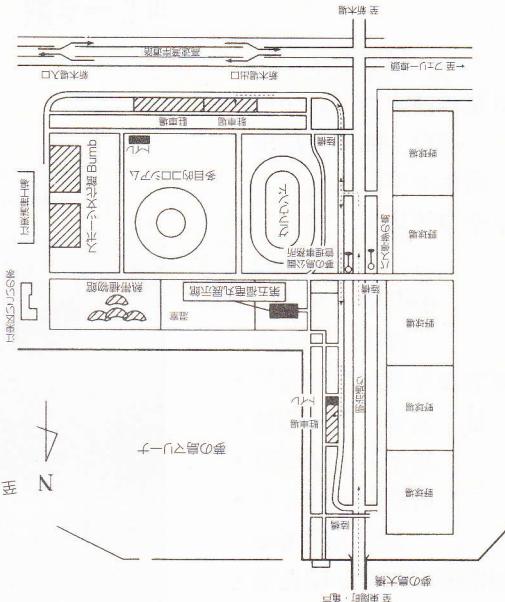
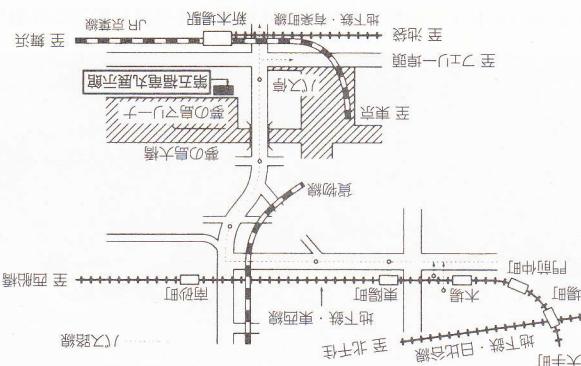
冬の 蝶

村山 凡葉子選

締切 十二月十日

各々五句同人社送付のこと

·東寧郡東部公團體理事會所管理課 電話 03-3821-6145
·素泰記書局 買回法人 第五福龍光大和株式會社
江東區夢之島32 第五福龍光大和株式會社
電話 03-3521-8494
T 136-0081



●錄音地點2階建/菱形口/平面圖面積798.1m²/建築面積802.5m²

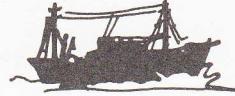
所在地/東莞市東莞區圖力司3-2、圖力公司

第五福竜丸展示館

東 京 都

開館時間。午前9時30分から午後4時まで、月曜日休館、入場無料

展示の趣旨



この展示館には、木造のマグロ漁船「第五福竜丸」およびその付属品や関係資料を展示しています。「第五福竜丸」は、昭和29年(1954年)3月1日に太平洋のマーシャル諸島にあるビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験によって被害を受けました。

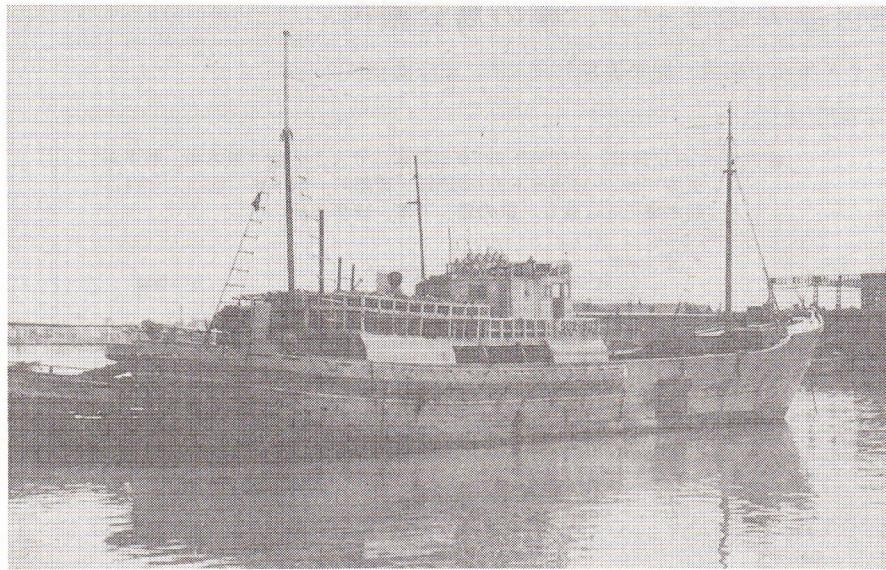
木造漁船での近海漁業は現在も行われていますが、当時はこのような木造船で遠くの海まで魚を求めて行ったのです。

「第五福竜丸」は、昭和22年(1947年)に和歌山県で建造され、初めはカツオ漁船として活躍し、後にマグロ漁船に改造され遠洋漁業に出ています。水爆実験での被爆後は、練習船に改

造されて東京水産大学で使われていましたが、昭和42年(1967年)に廃船になったものです。

東京都は、遠洋漁業に出ていた木造漁船を実物によって知っていただくとともに、原水爆による惨禍がふたたび起こらないようにという願いをこめて、この展示館を建設しました。

(昭和51年6月10日開館)



▲焼津港に帰港した第五福竜丸(1954年3月) 3月14日焼津港に帰った福竜丸は大変な放射能で、マグロは捨てられ、乗組員23名は全員急性放射能症で東京の病院に入院。無線長だった久保山愛吉さんはその年の9月23日亡くなりました。

第五福竜丸 総トン数=140.86トン

長さ=28.56m, 幅=5.9m, 高さ=15m, 深さ=3m

主な展示品

- 福竜丸の船体と付属品
いかり、漁具類など
- 船室内の模型、乗組員の生活用品類
- マグロ漁の模型
- 無線機・大漁旗
- 航海日誌・公式文書
- 久保山愛吉さんの船員手帳、手紙類
- ガイガーチェンジャー
- 「死の灰」
- ビキニ水爆被災にかかる写真パネル多数
- 当時の新聞・雑誌
- その他、原水爆被災にかかる資料